

光 一、次の①く⑤の文の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

聖

- ① 小学生で国際大会に出場するとは、前途ユウボウな少年だ。
- ② ミツペイされた箱の中には昆虫の標本が並んでいた。
- ③ 最近、フンマツ状の葉も簡単に飲めるようなゼリーが開発されている。
- ④ このマンションでは、動物を飼うことについては一戸につき一匹までキョヨウされている。
- ⑤ 家族で猪苗代湖に旅行に出かけ、ユウラン船に乗った。

二、次の①く⑤の文のカタカナの部分の漢字に直した場合、——線部に使う漢字の訓読みを、送りがなも含めて答えなさい。ただし、その送りがなはいずれも「う」か「む」になるものとします。

例
我がチー <u>ム</u> には優秀な人材がホウ <u>フ</u> だ。 ↓ 「(豊)富」 ↓ (答)とむ

- ① 学校の運動場が使えないので、コウエイの運動場を借りて練習した。
- ② 私はホケツだったが、いつも心は出場選手とともにあった。
- ③ 決勝戦は見たえのある展開になり、思わずコウフンした。
- ④ セツキヨク的に攻めたおかげで、次々に得点を重ねることができた。
- ⑤ 試合の終了時間がコクコクと迫っていた。

光 三、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

聖

川合和也（僕）は中学三年生。毎年夏に、地元の子どもたちが地区対抗で踊る「狐がえり」を小五のミヤコ、小二のサナオと一緒に踊ることになっている。和也はグループの最年長者としてこの伝統行事を成功させねばならない責任を担っていた。しかし三人では人数が足りない。やむなく和也は、転校してきたばかりの同級生、三崎花子を誘うが、断られ続けていた。そこでサナオが一計を案じ、近くの川で獲った鮎を手みやげに頼みこむことになった。

悪戦苦闘の結果、僕たちは八匹の鮎を獲得することができた。スーパーの袋に無造作に突っ込んだ鮎は、中でまだ身体をよじって動いている。

「おいしそうや」

サナオは何回も袋の中の鮎を覗きこんだ。

「ほんまや。今すぐ焼いたら、絶対おいしいで」

僕もごくりとつばを飲み込んだ。

「あかんって。全部三崎にあげないと」

何とかして食べようとする僕とサナオは、ミヤコに何度もダメ押しされた。

「なんで。こんないっぱいいらんやん」

「そうや。一匹くらい食べたっていいやん」

「けちると、うまくいかへんのよ。女の子はけちな男は嫌いななんやもん」

最近、ミヤコはすぐ女の子はこうだって言う。つるつるの短いスカートから、擦り傷だらけのひざを丸出しにして、男の子よりも速く走るミヤコは、どこにも女の子っていうイメージはない。^①僕はミヤコが「女の子は」って言うたびに、吹き出しそうになってしまう。だけど、しつこく食べたがる僕とサナオから、必死で鮎を守るミヤコは頼もしい。本当は、ミヤコは誰よりも鮎が好きなのに。きつと、ミヤコもサナオも僕と同じように、狐がえりのことを真剣に考えているのだ。

鮎の入った袋を大事に持って、三人で三崎の家の前に並んだ。「うまくいきますように」と、ミヤコがちゃんと手を合わせた。サナオは成功することが目に見えているのか、嬉しそうにジャンプしながら三崎家のチャイムを鳴らした。

「あれ？」

三崎花子はドアを開けると、ことに驚いた。

「ああ、ミヤコとサナオ。みんな狐がえりのメンバーやねん」

ミヤコは小さなお辞儀をして、サナオだけが元氣よく大きな声で「こんにちは」と、挨拶をした。

「えっと、あの、これ」

僕は二人の紹介もそこそこに、すぐに鮎の入ったビニール袋を三崎に差し出した。

「何？」

「三人で釣ったんや。あげるわ」

三崎は怪訝そうに袋を受け取った。ミヤコもサナオも、わくわくした顔で三崎を見つめている。ところが、三崎は中を見たたん、小さな悲鳴を上げ、鮎の入った袋を地面に落とした。

「なんや。そないに驚かんといて」

僕は突然のプレゼントに驚いたのかと思い、鮎の入った袋を拾うと、もう一度、三崎に渡そうとした。だけど、三崎は手を出そうともしない。

「いや、こんなのいらない」

「へ？」

僕たちは予想外の三崎の反応に戸惑った。三崎が遠慮していると思ったサナオが「^②大丈夫。全部あげるから」と言っ、三崎の手を取り、鮎の袋を握らせようとした。しかし、三崎は手を固く握って、受け取ろうとはしない。

「どないしたんな」

「そんなの気持ち悪い」

三崎はうつむいたまま言った。

「何も気持ち悪くないって、鮎やんか。汚いもんやないで。今日、朝からみんなで釣ってん。新鮮やし、うまいんやで」
「いらないよ。そんなの」

「そう言わんと。食べてえな」

僕がもう一度、袋を三崎に押し付けると、

「気持ち悪い。絶対無理！」

と、三崎は右手で袋を払いのけた。その弾みで袋は勢いよく落下し、中から何匹かの鮎が飛び出した。^③土に投げ出された鮎は、なんとも情けない格好をしている。その様子にびっくりしたのか、鮎が断られたショックだったのか、突然サナオが泣きだした。

「^④いや、あの、ほら、生の魚ってあんまり見ないから……」

三崎が、しゃくりあげるサナオにおろおろしながら声をかけた。

「ねえ、ちょっと、そんなに泣かないでよ。だって、こんなぬるぬるしてそうな魚、渡されたら、誰だって怖いでしょう？」

三崎がなだめても、一向にサナオは泣き止まない。

「ほんま、あんたって最悪や。ひどいことばかりしよる。あんたなんか、こっから出て行ったらええのに」

今まで黙っていたミヤコは、三崎の顔をにらみつけて怒鳴った。そして、サナオの手をとって、走り出した。

「ちょっと、ミヤコ、待ってや」

ミヤコは僕が声をかけても振り返らず、泣いているサナオを強引に引っ張りながら、走っていつてしまった。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。うまくいくはずだったのに、大失敗だ。三崎もミヤコもサナオも、みんな気を悪くしてしまった。物で釣ろうとした^{*}姑息な手段がだめだったのだろうか。僕は大きなため息をついた。

三崎はサナオに泣かれ、ミヤコにでかい声で怒鳴られて、ぼんやりと立っていた。これでは狐がえりに誘うところではない。

聖 「気にせんというて」

僕はそう言い残して、鮎を拾い集めると、ミヤコたちの後を追いかけた。

ミヤコもサナオも相当傷ついたのか、みんなで分けようと言ったのに、「もう鮎なんて食べたくもない」と受け取らなかった。仕方なく、八匹の鮎を持って帰ると、母ちゃんも姉ちゃんもとても喜んだ。夕飯のおかずが僕が釣った鮎だと知ると、遊んでいる暇があつたら勉強しろと、いつも怒っている父ちゃんまでも「でかした」とほめてくれた。

どうしてみんな喜んでくれるのに、三崎はにこりともせずに怒るのだろうか。本当に都会っ子の考えていることはわからない。

僕がぶつぶつ言いながら鮎をかじっていると、姉ちゃんが笑った。

「ほら、『都会のねずみと田舎のねずみ』って絵本があるやない。あんたが子どものときよく読んでたやつ」
「それがどないしたんや」

その絵本は覚えている。田舎で暮らしているねずみと都会で暮らしているねずみが、それぞれ互いの住みかをうらやましがつて、住みかを交換する。だけど、いざ生活してみると、ちつとも楽しくない。都会のねずみは都会じゃないと生きていけないし、田舎のねずみは田舎が一番居心地がいいという話だ。

「それと一緒にやん。喜ぶことはそれぞれ違うってこと」

「なんや。こんなうまいもん、喜ばへんのがわからんわ」

捕れたての鮎は、焼くと皮はパリッとして、味が濃く、苦味までもがすっきりしておいしい。

⑤ 「まったく子どもやね」

三つしか歳が変わらないのに、姉ちゃんはえらそうに言った。

「和也かって、いきなりハイテクコンピューターをもらっても、困るやろう」

「それは嬉しいで」

「じゃあ、マクドナルドの商品券は？」

「そんなもん、店がこちら辺にないのにいらんわ」

「ほらごらん。それと一緒にやつて。鮎かって、いらん人は、いらんのやつて。受け口やし不細工な顔した魚やねもん」

「なんやねん。そんなん鮎に失礼や」

僕は鮎の代わりに、姉ちゃんに怒つてやった。鮎は頭だつていいし、色のきれいなかわいい魚だ。

「和也だつてさ、街に行つて突然、妙な祭りに参加させられたら、うんざりするはずや。最近の和也つて、都会のものは都会のものはつて、なんか年寄りみたいやよ」

⑥ 鮎とマクドナルドの商品券がどう一緒なのかさっぱりわからないし、狐がえりは妙な祭りではない。そう言い返そう

と思ったけど、残念ながら姉ちゃんの言うことには一理ある。

都会の中学生と田舎の中学生は、ねずみほどじゃないけど、やっぱり違いはある。僕にとってすごく貴重なものでも、三崎にとっては気味悪いものなのかもしれない。狐がえりだって、それと一緒に。僕らは昔からやってるから疑問もないけど、三崎からしたらすごい変なことかもしれない。

僕は都会に転校して、毎日ヤンキー風の中学生に「一緒にヒップホップダンスを踊ろうぜ」と誘われている自分を想像してみた。それは、とんでもなくうつとうしい。そのうえ、都会にだけ生息している不気味な生き物を、おいしいから食えと、集団で持ってこられたら、やっぱり引いてしまう。こっそり田舎に引き返してしまいたくなるはずだ。

きつと、三崎だって、毎日、田舎丸出しの僕にわけのわからない祭りに誘われ、嫌な思いをしていたに違いない。

⑦ 最近の僕は、狐がえりに踊らされてしまっていた。僕はそう考えると、じつとしていられなくなった。

(瀬尾まいこ『狐フェスティバル』による)

注 * 姑息な手段……ずるい手段。

問一 —— 線部①に「僕はミヤコが『女の子は』って言うたびに、吹き出しそうになってしまふ」とありますが、なぜ吹き出しそうになってしまふのですか。次のア～オの中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 男の子のような格好をして元気よく遊ぶミヤコが、いきなりしとやかな話し方をするから。
- イ 女の子について語ろうとするミヤコが、女の子らしからぬえらそうな話し方をするから。
- ウ ふだんは男勝りのことを言っているミヤコが、女の子は男の子をどう思うかなどという話をするから。
- エ 自分自身はまるで女の子らしくないミヤコが、女の子の代表であるかのように話すから。
- オ 女の子のことなど知っていそうにないミヤコが、まるで熟知しているかのように話すから。

問二 に入れるのに最もふさわしい言葉を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 三人がそろっている
- イ 僕たちがプレゼントを持ってきた
- ウ またしても僕たちが誘いにきた
- エ 僕たちがスーパ―の袋を持っている
- オ 僕だけじゃない

問三——線部②に「大丈夫。全部あげるから」とありますが、この時のサナオの心情について説明した文として、最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 三崎が自分たちの好意にとまどっていると誤解し、冗談にまぎらせて三崎の気持ちを和らげようとしている。
 イ 三崎が自分たちの誘いを断ろうとしていることに気づき、魚を全部差し出すことで気を引こうとしている。
 ウ 三崎が鮎を独占することに引け目を感じているとわかり、優しい言葉で安心させようとしている。
 エ 三崎が自分たちに気をつかっているのだと思い、気にせず受け取ってほしいと伝えようとしている。
 オ 三崎が魚を嫌っていることを知り、なんとかそのおいしさに気づかせてあげようとしている。

問四——線部③に「土に投げ出された鮎は、なんとも情けない格好をしている」とありますが、この表現は何を象徴していますか。それについて説明した次の文の□にあてはまる言葉を、二十～三十字で答えなさい。

鮎の情けない姿は



を象徴している。

問五——線部④に「いや、あの、ほら、生の魚ってあんまり見ないから……」とありますが、この時の三崎の心情はどのようなものだったと考えられますか。次のア～オの中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 生の魚が気味悪く、はねのけてしまったものの、サナオが突然泣き出したことで気がとがめて、なんとかその場をとりつくろおうとあわてている。
 イ 魚に対する嫌悪感から思わず鮎をはねのけてしまったが、意外にもサナオが泣き出したため、どうしたらよいかかわからず、途方に暮れている。

- ウ 鮎を無理やり押しつけてくる三人が悪いのに、サナオが泣いたせいで、まるで自分の方が悪いかのように見えてしまっていることに迷惑している。
 エ 気味の悪い魚を持ってこられるだけでも迷惑なのに、その上突然泣き出したサナオをなぐさめなくてはならなくなっただけで、うんざりしている。

- オ 善意で持ってきてくれた鮎をはねのけてしまったことで気がとがめていたところへ、さらにサナオが泣き出してしまったことで、うろたえている。

問六 —— 線部⑤に「まったく子どもやね」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最もふさわ

しいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 怒^{おこ}っていたくせに、鮎^{あゆ}を一口食べただけで機嫌^{きげん}を直してしまうような「僕」はまだまだ幼いということ。

イ 都会育ちの三崎^{はなこ}花子に、田舎^{いなか}ならではの鮎^{あゆ}の味を教えてやろうと鮎^{あゆ}を贈^{おく}る「僕」は子どもっぽいうこと。

ウ 贈り物で人の気持ちを動かすような手段をとらざるを得ない「僕」はリーダーとして頼^{たよ}りないということ。

エ 自分にとって嬉しい^{うれ}いというだけで、他の人も同じように感じるだろうと思う「僕」は子どもっぽいうこと。

オ 人の気持ちも考えずに「狐^{きつね}がえり」などという子どもだましにこだわる「僕」はまだまだ幼いということ。

問七 —— 線部⑥に「鮎^{あゆ}とマクドナルドの商品券がどう一緒^{いっしょ}なのかさっぱりわからない」とありますが、この場合、

「鮎^{あゆ}」と「マクドナルドの商品券」に共通するのはどういう点ですか。二十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問八 —— 線部⑦に「最近の僕は、狐^{きつね}がえりに踊^{おど}らされてしまっていた」とありますが、どういうことですか。その

説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 受け継^つがれてきた伝統の行事を成功させるためには、最年長の自分の考え方を優先させるべきだと思いこみ、仲間や友人がそれをどう思うか考えなかったということ。

イ 地区対抗^{たいこう}で踊^{おど}る「狐^{きつね}がえり」に優勝しなければならぬという責任感から、メンバーを集めることに必死になるあまり、我を忘れてしまっていたということ。

ウ 中学三年生の自分ががんばることで、大切な伝統行事を成功させるのだという思いが強すぎて、人の気持ちを思いやる冷静な心を失っていたということ。

エ 伝統行事だからうまく踊^{おど}れないと地元の人々に顔向けできないという思いから、みんなのために踊^{おど}らされているような気持ちになっていたということ。

オ 地元の行事が近づいてきた高ぶりから、転校してきたばかりの女の子の不安な気持ちを察することができず、強引^{こういん}な行動をとってしまったということ。

四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私が書店経営者や書店員へのインタビューを始めてから二十年近くになる。^{*1} 発表媒体は取次（出版界の問屋のようなもの）が書店経営者向けに発行している雑誌だったり、出版社のPR誌だったり。ときおり一般誌や^{*2} ムックでもそうした仕事がある。書店の棚を眺めているのは楽しいし、書店員や経営者に話を聞くのも楽しい。同じことをずっと続けていると、ほかのこともよく見えるようになってくる。たとえば^{*3} アパレル業界取材するときも、^①書店業界を基準線に考えると、自分の中で考えをまとめやすい。

書店インタビューは作家やタレント、学者などへのインタビューとはすこし違ったところがあり、また、情報誌などで「店取材」と呼ばれる仕事とも共通したところがあるので、その実際について紹介したい。

書店インタビューが著名人へのインタビューといちばん違うのは、事前の準備である。下調べをしようにも、資料があまりない。最近はホームページを持つ書店もポツポツ現れてきたけれども、そこから入手できる情報はごく限られている。場所や規模、店の特徴などの情報は与えられるが、でもそれは最低限のデータ程度しかない。だから、実際にその書店に行ってみて、店頭を見ることが最大の下調べになる。

書店を取材するときは約束の時間より早めに先方に着くようにする。インタビューの前に店頭を観察するためだ。他の小売業でも同じだが、書店のすべては棚に表現されている。接客態度や各種のサービスを売り物にしている書店もあるけれども、それも含めて棚を丹念に見ればだいたいはわかる。どのように棚を置き、棚の中や、「平台」と呼ばれる

台にどんなふうに本を並べるか、一冊の本の隣にどんな本を置いているか。表示や装飾はどうなっているか。

もっとも、^② 棚からその書店のことをあれこれ「読む」には、それなりの知識や経験も必要だ。私の場合は、これまでに二十年近く書店の人から話を聞いてきて、棚に並んだ本とその裏側にある事情がある程度結びついているし、七年間洋書店で働いた経験もある。書店のことも出版流通のことも何も知らない人がいきなり書店の棚を見てもよくわからないかもしれない。インタビューという仕事のいいところは、今日インタビューした経験が、明日以降のインタビューにそのまま役立っていくことだ。A書店の経営者に聞いたことが、翌日のB書店の取材で活かされる。

店内をひととおり観察した後、一旦、店の外に出る。店の周囲をひとまわり歩く。商店街なら、まわりにどんな店があるか。郊外店なら、どんな環境なのか。通りを歩いている人の年齢や服装なども見る。時間があれば近所の喫茶店に入ってコーヒーを飲みながら、ゆっくり街を観察する。

郊外にある書店を取材するときは、最寄りの駅からタクシーに乗って、タクシー運転手にその店の評判を聞くこともある。地方のタクシードライバーは情報の宝庫だ。「あの本屋のオヤジはもともと^{*4} バッタ屋から始めたんだよ」とか、「あの店は前はパチンコ屋で、その前はスキー道具屋。何をやっても長続きしない場所なんだよね。本屋はどうか」なんて話が聞けることもある。

約束の時間になったら、あらためて取材先に入る。ここで初めて挨拶し、名刺を交換するのだけれども、たいていは先方はこちらが下見していたことを知っている。本屋に限らず、小売店のレジカウンターからは客がよく見える。見慣れない客、初めての客が来ると、すぐにわかる。棚を見ている様子からも、本を探しに来たのか、散歩ついでの暇つぶ

しか、あるいは他に目的があつてのことか、すぐにわかる。「さきほど一度いらつしやつてましたね」などと言われる。それからインタビューを始めるのだが、できる限り、事務所か近所の喫茶店など、売場以外のところで話を聞くようにする。売場では客に関する話は聞きにくいからだ。万引き防止はどうしているかなんていう話題はもちろんのこと、「A支店に比べるとこちらのお客さんはあまりかたい本は買っていないので」なんていう程度の話も出にくい。

私はこうした店取材では、なるべく時系列に従って質問をするように心がけている。Aは何年にどこで生まれ、学校ではどんなことを勉強したのか、クラブ活動は何をやり、将来はどんな職業に就きたかったのか。なぜ書店員という仕事を選んだのか。書店に入ってからほどのような仕事を担当してきて、現在の部門はいつからやっているのか、というような話を順番に聞いていく。Bについてだけでなく、その会社はいつごろ創業したのか、この店舗はいつ開店したのか。開店のいきさつや、そのときに考えた*⁵コンセプト、客層、開店準備、開店してからの変化、事件やトラブル、最近の傾向、今後の予定や展望などを聞いていく。

時系列に従って話を聞いていくのは、Cにとって事実関係を*⁶俯瞰して捉えやすいからであり、話し手にとっては自分の言葉を物語化しやすいからだ。インタビュー慣れしていない人にとって、話すことに慣れるという意味もある。いきなり「この店のコンセプトは」などと抽象的なことを聞かれるよりも、具体的にいつどんなことがあったかを順番に話すほうが気楽だろう。時系列に従って話を聞いて、その書店や書店員、経営者の状況を大づかみで捉えておいてから、そのうえで先ほど観察して気になったこと、テーマとなりうることについて質問を重ねていく。

福岡市に「ブックスキューブリック」という書店がある。売場わずか十三坪半の小さな書店だが、建築・デザイン書

や料理書、生活実用書が突出した品揃えだ。店主はアパレル業界やイベントプランニング会社に勤めていた人で、いわば脱サラ書店主。京都の大学で社会学を学んだのち、ローマやフィレンツェに暮らしていたこともある。夫人は福岡市内に事務所を持つインテリア・デザイナーである。書店を開業するまでどんなことをしてきたか、開店してからどんなことがあったかを先に聞いておくと、「なぜ建築・デザインの本に力をいれているのか」「どうして（売れるはずの）コミックを置かないのか」といった質問もしやすい。「大人が自分の生活をデザインしていくときに、情報源となり道具となるような本を集めたかった」という言葉がDから出てきたとき、Eにはそれを具体的な原稿のなかでどう使うのが想像できる。「大人だけの店にしたかったからコミックは排除した」という言葉もすんなり入ってくる。

もっとも、③こうした物語化には危険もある。わかりやすい因果関係を求めてしまうあまり、他の要素を見えなくしてしまうことがあるからだ。同じように建築・デザインの本に力を入れている書店があったとしても、それはたまたま付近にデザイン事務所が数多くあるという立地条件のためかもしれないし、「建築・インテリアがブームだから」ということかもしれない。「美大のデザイン科を出て、もともとこのジャンルが好きだったんです」などと言われると、「だから建築・デザインのコーナーを作りました」という話にまとめてしまいたくなるが、本当は立地条件や流行のほ

うが大きな理由かもしれない。

インタビュー記事を発表する媒体が一般誌で、読者層は一般の読書好きや書店好きを想定しているのなら「美大を出たからデザイン書」でいいが、書店員や書店経営者に経営のヒントを提供する媒体ならば、デザイン書の*⁷法人需要

や立地条件と専門書の売れ行きといったことに比重を置いたほうが役に立つ。インタビューはおもしろければいいというものではない。

(永江 朗 『インタビュー術!』による)

注 *1 発表媒体……ここでは、インタビューが掲載される本や雑誌のこと。

*2 ムック……雑誌のような体裁で作られた本のこと。

*3 アパレル……ファッション、衣料などの製造業のこと。

*4 バック屋……正規の経路を経ずに手に入れた商品を安く売る人のこと。

*5 コンセプト……ここでは、店をつくる時の基本的な構想のこと。

*6 俯瞰……上から見下ろすこと。

*7 法人需要……企業がどれほどその商品を購入するかという傾向や数値のこと。

問一

A

E

にはそれぞれ、「インタビューする人」という意味の「インタビュアー」、「インタ

ビューに答える人」という意味の「インタビュイー」のどちらかが入ります。この中で「インタビュイー」が入る

をすべて選び、記号で答えなさい。

問二

——線部①に「書店業界を基準線に考える」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 書店業界と比べて、その優劣を判断した上で、他の業界に対する評価を決めようとするということ。

イ 書店業界と比べて、社会的評価がどのように違っているかをもとに、他の業界について考察するということ。

ウ 書店業界と比べて、共通点や相違点を明らかにすることで、他の業界の状況をつかもうとするということ。

エ 書店業界と比べて、どこがどのように違うかを考えることで、他の業界に対する見方を変えようということ。

オ 書店業界と比べて、事前の情報入手が簡単かどうかで、取材のしやすさを推測しようとするということ。

問三 ―― 線部②に「棚たなからその書店のことをあれこれ『読む』」とありますが、これはどうするということですか。

その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 棚から実際に本を何冊か取り出して立ち読みしてみることで、客にとって居心地いこちのよい店であるかどうかなどを直感的につかみとるということ。

イ 棚の本の並び方を詳しく調べることによって、その書店の店主のこれまでの生き方や、本を売るといふ職業に対する考え方をつかむということ。

ウ 棚に並べられた本の種類を見ることで、出版流通の現状の中で、その書店が出版業界の動向をどのように判断しているかなどを理解すること。

エ 棚に並んだ本の種類やその配置から、その後におこなわれるはずの経営者や店員に対するインタビューの展開を予想し、少しでも心の準備をしようとするということ。

オ 棚に並べられた本の様子を見ることで、それぞれの本をどのようにとらえているか、またその書店が客にどのような姿勢で接しているかなどを見て取るということ。

問四

―― 線部③に「こうした物語化」とありますが、これはどうするということですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 店主の語る自分の経歴の中に、読者の共感を誘いさそうようなドラマを見つけ、店の現在のありようを美化してとらえるということ。

イ 原因と結果をおもしろそうな筋立てに整理した書店の成り立ちを、店主の言葉どおり、そのまま受け入れてしまふということ。

ウ インタビューをしている時に想像力を働かせ、店主の言葉を具体的にどのような使って原稿げんこうを組み立てるのかを、あらかじめ考えてしまふということ。

エ 開店のいきさつや店主の経歴と、品揃えしなぞろや本の配置といった書店の現状とを、理解しやすいかたちに単純化して結びつけるということ。

オ 書店の歴史や開店の事情など、インタビューの時に店主が語ったことがらに、読者がおもしろがるような味付けをして記事をまとめるということ。

